

# ジェイン・オースティン

## 『マンスフィールド・パーク』

宮崎 孝一

### (1) 語りの重層性

#### I

サー・トマス・バートラム (Sir Thomas Bertram) は、ノーサンプシャーのマンスフィールド・パーク (Mansfield Park) に住む准男爵で、下院議員である。妻の末の妹が、海兵隊の貧しい将校プライス (Price) と結婚し、九人の子供を抱えて生活が苦しいので、サー・トマスがプライス家の長女ファニー (Fanny) をマンスフィールドに引き取って育てることによって義妹の家計を少しでも楽にしてやろうということになる。このときファニーは十歳になっている。

バートラム家には四人の子供がいる。ファニーを迎えたとき、長男トマス (Thomas) は十七歳、次男エドモンド (Edmund) は十六歳、長女マリア (Maria) は十三歳、次女ジュリア (Julia) は十二歳である。サー・トマスは、これらの自分の子供たちと、姪のファニーとの扱い方について、ノリス夫人 (Mrs. Norris) に次のように語る。(ノリス夫人はバートラム夫人の姉で、教区牧師と結婚して近所に住んでいる。バートラム夫人が家政について極度に怠惰なので、サー・トマスは家のことは何かにつけてノリス夫人与話し合う習慣になっているのである。)

「女の子たちが大きくなるにつれて、どういうけじめをつけて育てるかは、ちょっと難しい問題になるな。うちの娘たちに、自分たちがどういう身分の者かの意識を忘れないようにさせて、しかも、従妹をあまり見下すことのないようにさせなくちゃならんからな。ファニーはあまり卑屈になっても困るが、自分はバートラム家の娘

じゃないのだということは覚えていてもらわなくちゃならん。……娘たちとファニーとでは、地位も、財産も、権利も、予想される遺産も、まるっきり違うのだから」(I, i)。

また、サー・トマスは、二人の息子たちがファニーと同じ家で育てられることによって、年頃になってから彼女に対して恋愛感情を抱くようになりはしないか、ということが気がかりの一つである。この危惧に対して、ノリス夫人は次のように答える。

「……息子さんたちが将来いどこに恋心を持つようになることを案じていらっしゃるのをございますか。世の中で、これほど起こりそうもないことは他にございませんよ。兄妹きょうだいのように、いつも一緒に育てられれば、そんな気持が起こりようはずがございません。そういう例は聞いたこともございませんもの。実際、一緒に育てることこそ、こういう危険を防ぐ一番確かな方法ですわ。あの子が美しい娘だとして、トムなりエドモンドなりが今から七年後に初めて会うというなら、その場合は何事が起こるかも知れませんけれどもね」(I, i)。

さて、バートラム家の娘たちは、新しく仲間に加わったファニーを、別世界から来た未開人を見るように、好奇の目を以て観察し、その結果を、母親やノリス夫人に報告する。

「あの子、全然何も知らないのよ。昨日もね、アイルランドへ行くのにはどちらの方向へ行けばいいのか尋ねたら、ワイト島へ渡りますって言うの。アイランド(島)って言えば、ワイト島しか頭になくて、世界中に他に島はないみたいなの。……私たちは、ずーうっと子供の頃でもイギリスの歴代の王さまの名前や、即位の年代や、治世中に起こった主な事件だってみんな言えたのにね」(I, ii)。

この姉妹は、その他、自分たちは、ローマの代々の皇帝たちや、異教徒の神話、また、すべての金属、半金属、惑星、有名な哲学者などについて

でも知っている」と自慢する。(このような表面的、断片的知識を暗記することが教養だと当時は一般に考えられ勝ちだった。)

さて、このように形式的な教育を受け、また、ファニーを軽蔑しながら育った二人の娘は、健全な判断力や、周囲の者に対する思いやりなど薬にしたくもない女性になって行く。その結末は成人後、二人とも軽率な恋愛遊戯の末、非常識な駈落ちをして醜聞の種になることであった。また、ファニーが、ノリス夫人の予言に反して従兄と結婚することになり、従姉たちを越えてマンスフィールドの中心的女性になることも、大きなアイロニーであろう。

## II

話は元に戻るが、ファニーがマンスフィールドに来てから五年ほど経ったとき教区牧師のノリス氏が死亡する。後にはグラント師 (Rev. Grant) が妻を連れて赴任して来る。

これと前後して、サー・トマスは西インド諸島のアンティーガ島 (Antigua) にある、自分の経営する砂糖黍農園の問題で、長男トマスを連れて島へ渡ることになる。一年間ほど滞在する予定である。サー・トマスの出発に際しての、家族の反応は一風変わっている。まず妻は、

バートラム夫人は、夫の安全について、いささかでも心配するということはなかった。島の生活が不便だろうと思いやることもしなかった。彼女は、自分以外の人が誰一人として、危険や困苦や疲労などを経験するとは考え及ばぬ種類の女性だったのである (I, iii)。

また、娘たちはと言うと、

この時に臨んでバートラム家の娘たちは気の毒な人たちであった。気の毒というのは、悲しみに暮れているからではなく、全然悲しんでいないからであった。娘たちは父親を愛していなかったし、父親も、娘たちの楽しみを理解することはなかった。従って、父親が留守になるのは大いに歓迎すべきことであった。娘たちは抑制から解放されることになったのだ。どういうことをすれば父親に叱られるかという具体的なことを考えていたわけではないが、とにかく

自由になったのだ、何をしたら平気なんだという感じであった (I, iii)。

十八世紀から十九世紀にかけて、サー・トマスのような人物は、いわゆる「家長」(patriarch)として、一家を支配する絶対的な権力を持っていたはずである。サー・トマスも確かに家長としての権力と威厳を一応家族から認められてはいた。しかし、内実においては、彼は家族から愛情に基づく理解を受けてはいず、娘たちにとっては、ただ煙たい存在に過ぎなかったわけである。サー・トマスが、自分の家長としての地位の内包するものの空虚さと無力さに気づかせられるのは、娘たちが失敗を犯した後であった。

### III

サー・トマスがアンティীগ島に旅立って後間もなく、グラント師の牧師館には、グラント夫人の弟と妹とがロンドンから遊びに来て滞在することになる。ヘンリー・クローフォード (Henry Crawford) と、メアリー (Mary)・クローフォードとで、この兄妹は忽ちバートラム家と親しくなる。

また、ノリス夫人は、サー・トマスに対する忠勤の一つとして、既に結婚適齢期に達しているマライアの結婚相手を探し出す。サザートン・コート (Southerton Court) に住む大変な財産家ジェームズ・ラッシュワース氏 (James Rushworth) である。マライアは彼との結婚式は父親が帰国してから挙げることにし、ともかく婚約をする。こうして、バートラム家に入出入りする人々の数が急激に増えることになる。

ヘンリー・クローフォードは、万事について、古いものを取り壊し、新しい様式を取り入れることが好きな、いわゆる改造家 (innovator) で、十八世紀に盛んになった、邸の周囲の庭園や植え込みなどを改造する改良工事 (improvement) についても一家言を持っている。このヘンリーの主唱で、ラッシュワース氏のサザートン・コートの景観を改造しようということになり、その下見ということで、ある日、バートラム家の兄妹たちや、クローフォード兄妹、また、ファニーも加わって、サザートンを訪問する。

邸に着いて間もなく、一行は屋外に出てみようということになる。芝

生の向うは森になっており、その向うには獵園が広がっている。獵園は、柵で囲まれていて、柵の門には鍵が掛かっている。ヘンリー、マライア、ラッシュワース、ファニーの四人が同行しているが、マライアが獵園の中へ入ってみたいと言うので、ラッシュワースが鍵を取りに邸へ引き返す。ところが、そのラッシュワースが戻るのをじっと待つことはせず、ヘンリーはマライアに向かって次のように言う。

「あなたは、鍵がなくては、それからラッシュワースさんの許可と保護がなくては、どうしても中へ入れないとおっしゃるのですか。その気にさえなれば、鍵など使わなくても、門の縁を回って簡単に入ることができますよ。私がお手伝いします。あなたが本当にもっと自由になりたいと思ひ、それはいけないことではないという気持におなりになりさえすれば、難なくできることです」(I, x)。

ヘンリーは、マライアの生き方に関してさえ、innovatorになる意気込みなのであろうか。二人の傍に腰をおろして休んでいたファニーは、心配になって次のように言って止めようとする。

「そんなことをしたら、怪我をなさいますよ。忍び返しに引掛かかって怪我をしたり、着物を引き裂いたり、隠れ垣 (ha-ha) に滑り落ちたりなさいますわ」(I, x)。

ファニーのこの忠告などには耳を貸さず、二人は門の横を通り抜けて行く。獵園に入って後の二人の所業については誰も知るべくもない。

トゥニー・タナー (Tony Tanner) の言うように、鍵の掛かった門は処女性象の象徴であるかも知れない<sup>1)</sup>。門を開くのは当然婚約者のラッシュワースであるはずなのに、彼の到着を待たずに、二人が獵園に入ることは、後に起こる墮落事件への伏線となっているものと見られる。そして、このとき二人が何の怪我もしなかったことは、後に大怪我をすることを暗示しているものであろう。

一方、メアリー・クローフォードとエドモンド・バートラムも二人だけで森の中を逍遙するが、これも二人の気持を語り合う絶好の機会であったろうし、二人が今後親密な関係になることの前兆であろう。

この日、大勢でサザートンを訪問した結果、庭園にどうい改革が施されることになったかは何も語られていない。人物たちにとって真に興味のある問題ではなかったのであろうし、作者の関心も、専ら人物たちの相互の心理の動きにあったのであろう。

#### IV

そのうち、トマス・バートラムの友人ジョン・イエイツ (John Yates) がマンスフィールドの客となり、彼の主唱で家庭劇をやろうということになる。こういう気分になるのも、サー・トマスが留守だという解放感によるものであった。しかし、演ずるべき劇がなかなか決まらない。若者たちのめいめいが、自分の才を発揮できそうな役を含むものを採用しようとして勝手な主張をするからであった。ついに『愛する者たちの誓い』<sup>2)</sup> (*Lovers' Vows*, August F. F. von Kotzebue 原作の *Das Kind der Liebe* を Inchbald 夫人が翻案したもの) に決定する。

この劇の梗概を簡単に記すと次のようなものである。

ウィルデンハイム (Wildenheim) 男爵家の小間使いアガサ (Agatha) は二十年前に主人に誘惑され、妊娠した後、捨てられて放浪の末、今、餓死に瀕している。ある兵士に救われるが、これが奇しくも彼女の私生児フレデリック (Frederick) である。彼は母親の食物を得ようとして物乞いに出るが、偶然男爵に会い、彼の金を奪おうとする。逮捕されるが、その結果、彼自身と男爵と母親との関係が明らかになる。フレデリックは男爵家のチャブレンのアンハルト (Anhalt) の助力を得て、男爵を説いてアガサと結婚させる。(男爵の本妻は既に他界している。) また男爵は、娘アミーリア (Amelia) を、金持ちだが愚鈍なカッセル (Cassel) 伯爵に嫁がせるつもりであったが、娘の願いによってアンハルトと結婚させることになる。(ちなみに、この劇の全文は *The Oxford Illustrated Jane Austen* 版の *Mansfield Park* の巻末に載っている。)

さて、この劇の配役は、演ずる者たちが、現実の生活において言い、行ないたいと思っていることにある程度合致するようになっていた。例えば、フレデリックにはヘンリー・クローフォードが扮し、その母アガサにはマライア・バートラムが扮することになった。また、チャブレンのアンハルトにはエドモンド・バートラムが扮し、彼が結婚することになるアミーリアにはメアリー・クローフォードが扮することになった。

この配役によって、この家庭劇の計画されていた時点で、非常に親しい関係にあったヘンリーとマライア、エドモンドとメアリーとは舞台の上で優しい言葉を交し、愛情を示す仕草にふけることができることになった。また、カッセル伯がアミーリアに捨てられることは、彼に扮するはずだったラッシュワースが作中で後に妻マライアと別れる運命に通じると言えよう。

作者が家庭劇の演し物として『愛する者たちの誓い』を選んだことは、『ハムレット』の劇中劇にも似て、作中人物の願望や事の成り行きを暗示していると言えよう。もっとも、読者がこの劇の内容を知らなければ効果はないわけであるが、『愛する者たちの誓い』は1798年にイギリスで初演されて以来繰り返し上演され、脚本も何度も出版されているから、ある程度一般に知られていたことであろう。(また、たとえ読者がこの劇の筋に通じていないとしても、そのために小説の面白さが非常に損なわれるということはあるまい。)

この劇をマンスフィールドで上演することは、リハーサルの日、サー・トマスが思い掛けず予定より早目に帰国することによって取り止めとなる。サー・トマスは家庭で劇を上演することにも、劇のために邸の中の一部でも模様替えすることにも到底我慢がならない人であった。取り止めは元来上演に反対だったファニー以外の者たちにとっては、大きな失望の種であった。ヘンリーなどは、サー・トマスの帰国がせめてあと一週間遅れてくれれば万事うまく行ったのにと残念がる。サー・トマスが、天候の変化や私掠船の掠奪などの犠牲とならず無事帰国したことの喜びなど、自分たちの楽しみだけに熱中している若者たちにとっては眼中にないのであった。このような点から見ても、マンスフィールド・パークの一家が今後どういう途をたどるかは予想されようというものである。

以上述べたことをまとめると、バートラム家の子女に対する周囲の期待と、サー・トマスの権威主義とは二つながら裏切られることになっており、強いアイロニーが見られる。また、サザートン・コート訪問の場と家庭劇上演の計画においては、後にバートラム家やクロフォード家の若者たちがたどる道が暗示されており、巧妙な伏線となっていると言えよう。

## (2) 人物たちの動き

### I バートラム家の人々

#### (1) サー・トマス・バートラム

サー・トマスは、単なる patriarch (家長) というもののイメージを越えた複雑な面を持った人物である。

彼が国内の先祖伝来の領地のみならず、遠い西インド諸島のアンティーガにまで農園を持って経済活動を行なっていることは、旧来の地主階級とは異なった生き方の表われであろう。島における彼の行動については作中に語られていないので読者は想像するより外ないが、当時この島では一般に奴隷が使われていたから、サー・トマスも奴隷たちと接触し、操縦することに苦心したものと思われる。

アンティーガから帰国したサー・トマスが、マンスフィールドで上演直前の状態まで進んでいた家庭劇を有無を言わせず中止させることには、家長としての彼の峻厳さが見られる。そして、帰国後の彼が、今までと打って変わって姪のファニーに対して優しくなることには、自分自身の子供たちが父親の留守中に示した野放図ぶりに対する失望が反映されているのかも知れない。しかし、そのうち、ヘンリー・クローフォードがファニーに対して執心を示すようになると、サー・トマスのファニーに対する優しさには、別の要素が含まれてくる。

サー・トマスが、八年間に未だかつてなかったことだが、ファニーの部屋に入って来てみると、冬の最中ださなかというのに暖炉に火が燃えていない。何かにつけてファニーに冷淡なノリス夫人が、この部屋には火を入れないように女中に言いつけて置いたのである。驚いたサー・トマスは、以後ファニーの部屋には毎日火を入れるように指図する。勿論ファニーにとって嬉しい処置に違いないが、これにはサー・トマスの秘められた魂胆があったものと思われる。つまり、サー・トマスは、非常な財産家のヘンリーとファニーとが結婚することは、自分の一家にとっても有利であるから、ファニーに自分の説得を聞き入れる心の下地を培うため、温かい雰囲気準備することにしたのであろう。クローディア・ジョンソン (Claudia L. Johnson) は、サー・トマスの行為に奴隷に対する主人の親切と共通するものを見出して次のように言っている。



ウェスト (West) やモー (More) やエジワース (Edgeworth) のような保守的な作家と対照的に、オースティンは慈悲の含む陰険な面と、慈悲がそれを受ける者に負わせる感謝の重さとに眼を向けている<sup>3)</sup>。

サー・トマスがグラント牧師の家と親しく交わるようになるのも、ヘンリーがそこに滞在しているからであるし、マンズフィールド邸で舞踏会を催すのも、ファニーとヘンリーが親しくなる機会を作ろうがためであった。しかし、このような、サー・トマスの様々な画策にもかかわらず、ファニーはついにヘンリーの求婚に耳を貸さず、サー・トマスは大きな失望を味わい、ファニーに対して元通りの厳しさに戻ることになる。

結婚についてのサー・トマスのもう一つの誤算は、彼の長女マライアに関して見られる。マライアがノリス夫人の肝いりで、財産家で家柄もよいジェームズ・ラッシュワースと婚約したことは、世間体から見ても歓迎すべきことであった。しかし、ラッシュワースが頭が鈍く、教養も趣味も乏しく、何の話題もない人物であることは、彼といささかでも接した者は皆気づくことであった。さすがにサー・トマスもこの婚約を喜んでばかりはいられず、マライアに対して、気が向かないならば今からでも断わることはできるから本当の気持を言うようにと促したのであった。これに対しマライアは、ラッシュワースさんの人柄は最高に尊敬申し上げますと、通り一遍の返事をしたのみであった。そこで、サー・トマスは、娘の将来が心配でないことはなかったが、この結婚の一家に有利な面の方が一層大きく心を占めているため、様々な尤もらしい理屈で自分を納得させて、この結婚を進めることにしたのであった。一方、マライアはと言えば彼女は、当時ヘンリー・クローフォードに心が傾き、気持の乱れの收拾に困難していたため、思い切ってラッシュワースと結婚してしまおうという捨て鉢の処置に出たのであった。この父娘の間には真の心の交流はなかったのである。この父娘が、すべてのことを打ち明け合う間柄にあったら、後にマライアの結婚が破綻するようなことはなかったであろう。

サー・トマスの不徹底さは、マライアの結婚問題において見られるのみならず、次男エドマンドが牧師になる折にも見られる。サー・トマス

は、牧師は自分の教区に住むべきだという意見である。

教区には、常にそこに住んでいる牧師でなくては分からない要求や願い事がある。代理牧師ではそれを十分に叶えてやれない。エドモンドはマンスフィールド・パークの仕事を怠けずに、一方、ソーントン (Thornton) でお祈りをし、説教をすることもできよう。週に一遍、自分が住んでいることになっている家へ馬で行って、お勤めをすることもできるだろう。七日目ごとに三、四時間ずつ、ソーントンの牧師になることも、自分がそれで満足できるならできよう。しかし、それでは駄目なのだ。人間性は、週に一度の説教が伝えられる以上の教訓が必要なのだ。教区民の間に住んで、常に面倒を見て、善意と友情を示さなければ、教区民のためにも自分のためにも役立つことはできないのだ (II, vii)。

この自分で垂れた教訓にもかかわらず、サー・トマスは実際にはエドモンドに二つの教区を与えている。(最初ソーントン・レーシー (Thornton Lacy) に、次にマンスフィールドに。) multiple incumbency (受禄かけもち) は当時しばしば行なわれていたところであったから、サー・トマスも、自分の元来の主張を抑えて、世間の慣行に従ったのであろう。ここにも実利の前には本来の主義を曲げる彼の生き方が見られる。さて、この小説の結末において、マライアとジュリアが二人とも駈落ちしたとき、サー・トマスは初めて自分の教育法の誤りについて反省する。

伯母ノリス夫人の極度の甘やかしと御機嫌とりとが、父親の峻厳さと絶えず対照的に発揮されていた家庭で、マライアとジュリアとが常に受けていた完全に相反する扱いが、若い子女の人格形成に如何に有害であったかにサー・トマスが気づいたのは余りにも遅すぎた。ノリス夫人のやり方の誤りを正そうとして、自分はそれと反対の態度を取ったことが、如何に間違った処置であったか——自分たちの真の気持を父親に知られないために、彼の面前では本当の意向を抑え、言いたいことも言わないようにし、あらゆる甘えは、盲目的愛情と過度のお世辞によってのみ娘たちを引きつけている伯母のところでは叶えてもらうように仕向けることによって、弊害をますます

す悪化させていたのだと、今にして、はっきり分かったのであった  
(Ⅲ, xvii)。

さて、不始末の結果、離婚したマライアとその一因となったノリス夫人とはマンスフィールドに留まらせてもらえず、永久追放となり、遠い土地で二人だけでわびしく暮らすことになるのは、厳しすぎる処罰と言えないであろうか。サー・トマスは上にも見たように、ノリス夫人と娘の誤りと共に、自分自身の誤りにも気づいたはずである。それなのに、ノリス夫人と娘にだけ冷たく当たるとは、彼の持ち前の他人への峻厳さは改められていないのであろうか。

## (2) エドモンド・バートラム

エドモンド・バートラムは気持が優しく、ファニーが十歳の少女としてマンスフィールドに移り住むようになってさびしい思いをしているとき、六歳年上の彼が話し相手になってやり、また、ファニーが海軍に入っている兄ウィリアム (William) を懐かしがり、手紙を出そうとするときにも手伝ってやった。ファニーが乗馬が好きだと知ると、彼女のために一頭の雌馬を見つけてやる親切さも示した。

彼は牧師志望であることから想像されるように、いわゆるまじめな青年であるが、精神に弾力性を欠き、想像力に乏しいという弱点は否めない。それは彼の、二人の女性ファニーとメアリーに対する応対の仕方に最も明らかに見られる。

グラント家に滞在するようになったメアリー・クローフォードに会って以来、彼は、ロンドン仕込の洗練された美人の彼女に日ごとに心が惹かれていった。そして、彼女の秘めている数々の欠点は彼の目には入らなかった。彼女の方でも、十分明確な態度は示さないものの、良家の青年に好意を持たれることは、彼女の自尊心をくすぐるものではあつたらう。ただ、虚栄心の強い彼女は、エドモンドが牧師という地味な職に就く予定であり、経済的にも窮屈な生活しか約束されないことを考えると、文句なしに彼に赴く決心はつかないのであった。一方、エドモンドのメアリーに対する執心ぶりは、家庭劇のとき、アミーリアを演ずることになったメアリーの相手役アンハルトを、仲間以外の青年が臨時に演じそうな形勢になったとき、エドモンドが自分から進んでこの役を演ず

ることを申し出たことによっても知られる。エドモンドは元来家庭劇上演には強く反対していたのであったが、その主張をも覆えさせるほど、彼のメアリーに対する愛着は強かったのである。

さて、ファニーは、幼いときから、バートラム家の人々の中で、エドモンドに一番親しみを感じていたが、やがて彼に深い愛を抱くようになった。ただし、万事に控え目で内気な彼女は、自分の愛を相手に向かって口に出すことも、態度に示すことも一度もなかった。以心伝心というように、表に出さなくとも心は相手に伝わるのが普通であろうが、エドモンドはこの点、甚だ鈍感で、ファニーの気持を忖度することなど全くなかった。それ故、自分のメアリーを愛する気持を、ファニーに向かってしばしば語り、家庭劇の稽古のときには、メアリーと自分との科白のやり取りをファニーに聞いてもらって意見を求めるといふ、ファニーにとってはつらい役目を引き受けさせさせた。

やがて、ヘンリーがファニーを愛するようになり、求婚したと知ると、エドモンドは二人の結婚を促進することに熱中する。ファニーが、ヘンリーと自分とでは、気質も趣味も万事違い過ぎるからと、承諾する気持のないことを婉曲に告げると、エドモンドは、むきになって説得にかかる。

「ファニー、君の言うことは間違っているよ。二人が違っていて言ったって、そう激しいものじゃないよ。似通っている所も十分にあるしね。趣味の共通した点もあるじゃないか。行動や文学の上でも共通の趣味を持っているようだ。二人とも温かい気持と親切な感情の持ち主だ。この間、ヘンリーがシェイクスピアを朗読するのを君が聞いていたときの様子から見たって、二人が人生の道連れとしてふさわしくないなどと思う者はいないだろうよ。……彼は快活で、君はまじめだ。しかし、それがかえっていいのじゃないか。彼の元気が君のおとなしさの支えになってくれるよ……」(Ⅲ, iv)。

以下、エドモンドは、熱心に、延々と、この結婚の好ましさについて説く。それを聞かされるファニーの気持はたまったものではなかったであろうが、エドモンドは自分の一人よがりの親切心に酔って、相手の反応を観察する余裕もなかったのであろう。

小説の末尾で、ヘンリーがマライアと駈落ちするという椿事により、ファニーとエドモンドが結婚することになるが、果たして、こういう結婚がうまく行くものであろうか。このことについては、後にファニーについて考察する折に、問題にしてみたい。

なお、エドモンドの兄トマスは早くからロンドンに出て都会の汚濁に染まり、乱行の果て多額の借金を作り、その支払いのため弟のエドモンドが受け継ぐはずだった聖職禄も人手に渡さねばならなくなった。物領の甚六というところであろうか。しかし、大病をした末、後には真人間になることになっている。

### (3) マライアとジュリア

マライアとラッシュワースとが結婚する気持になったことについては、作中に次のように記されている。

ラッシュワース氏は、一目見たときからマライア嬢の美しさに圧倒されてしまった。そして、とにかく誰かと結婚しようという気持があったから、やがて彼女を愛しているものと思い込んだ。彼は鈍重な青年で、何事にも通り一遍の考え以上は持っていなかったが、彼の姿にも物腰にも不愉快な点はなかったから、彼女は彼を惹きつけたことに十分満足だった。もう二十一歳になっていたから、マライアは結婚することが義務だと考えるようになっていた。ラッシュワース氏と結婚すれば、父親よりも豊かな収入が得られるし、ロンドンに家を持てるようになることを考えると……できることならラッシュワース氏と結婚することが明らかに道徳的義務だと思えてきた (I, iv)。

こういう考えから二人は婚約するのだが、やがて恋愛遊戯の名手ヘンリー・クローフォードの出現により、マライアの心はかき乱されることになる。前に見たように、彼女は表面的教育を受けたのみで、物事を冷静に判断する訓練はいささかも受けていなかったのである。サザートン・コートを大勢で訪ねたときの、ヘンリーとマライアとの怪しい行動、また、家庭劇においてヘンリーとマライアとが演ずる濃厚な役割等

については既に述べた。この劇において、ラッシュワースは、ほんの数行科白をしゃべる端役しか与えられなかった。彼の無能ぶりは既に衆目の一致するところとなっていたのである。

マライアのラッシュワースに対する気持は冷却せざるを得なかったが、一方、ヘンリー・クロフォードは、思いのままに彼女の心を弄んだ後、突然マンフィールドを離れてしまい、彼女に対する何の便りもなかった。そこで、彼女は次のように決心する。

ヘンリー・クロフォードは私の幸福を台なしにしてしまった。しかし、彼にそのことを知らせるのは嫌だ。私の信用や体面や、栄華を彼に破壊させてはならない。私がマンフィールドの片隅に引っ込んで彼に思いこがれているなどと思わせるのは御免だ。私には、サザートンとロンドンと独立と華かさが用意されているのだ。……父の圧制とマンフィールドからできるだけ早く逃れて、富と身分を獲得し、群衆と世間に混って、傷ついた心を慰めるのだ (II, iii)。

彼女の決意は悲壮とも呼べそうなものであったが、既に見た通り、期待通りの好結果はもたらさなかった。

マライアの妹ジュリアは、姉と一つ違いであり、性質もよく似ている。姉と同様にヘンリー・クロフォードに惹かれるが、ヘンリーが姉の方をちやほやするので強い嫉妬を感じる。家庭劇のとき、彼女が参加しなかったのも、姉がヘンリーの相手役を演ずることになったのが面白くなかったからであった。

さて、彼女は家庭劇のとき、その火付け役だったイエイツに後にロンドンで会い、彼に誘われて駈落ちする。上流社会に属する遊び人という以外に取り柄のないイエイツの言葉に簡単に従うとは、驚くべく軽率な行動に思われるが、姉がクロフォードと駈落ちしたことに対する父親の怒りと締めつけが自分にも及ぶのを恐れた結果であった。

ジュリアの駈落ちの動機がこのように単純なものであり、やがてイエイツと正式に結婚もするので、彼女は一応父親の許しを与えられることになる。

## II クローフォード兄妹

### (1) ヘンリー・クローフォード

ヘンリーは生まれながらの役者 (actor) と呼んでもよく、様々な役を申し分なく巧みにこなす術を心得ていた。彼はある役を演じている間は、心身の半分以上までその人物になり切っていたのかも知れない。サザートン・コート庭園の改造の件でラッシュワース邸を訪れたときの彼は、本職の innovator (改造家) 顔負けの貫禄であった。家庭劇の下稽古の際にも、彼の演技は他を圧していたし、また、作品を朗読しても聴く者を魅了する力があつた。バートラム夫人の部屋で、彼がたまたま手にしたシェイクスピアの『ヘンリー八世』を読んだとき、同席したファニーは我にもなく感嘆せざるを得なかつた。

王、王妃、バッキンガム、ウルジー、クロムウェル等の科白が次々に読み進められたが、……威厳であれ、自負であれ、愛情であれ、悔恨であれ、その他、表現すべきものが何であっても、彼は均しく素晴らしくやつてのけた。真に劇的であつた。家庭劇の稽古のとき、所作の伝える快感をファニーは彼の演技から初めて知つたのだったが、今、彼の朗読が再び彼の演技を目の前によみがえらせた (III, iii)。

この演技の天才が、現実の生活において愛人の役を演じようと決心すれば、カリスマ的な力をもって狙つた女性を惹きつけ得るのは当然であろう。マライアとジュリアとはまんまとこの標的にされたのである。しかし、この二人の女性を相手の場合には、ヘンリーの気持には遊びに近い余裕があつた。

ところが、ヘンリーがファニーを相手に演ずる恋は、上の二人との場合とは趣を異にしていた。確かに、初めのうちは、ヘンリーのファニーに対する気持は今までの場合と変わりはなかつた。彼と妹のメアリーとの間には次のような言葉が交わされる。

「僕は、ファニー・ブライスが僕を愛するように仕向けるつもりだ」

「ファニー・プライスですって！ 馬鹿らしい！ 駄目、駄目。  
二人の従姉だけで満足してらっしゃい」

「だって、僕はファニー・プライスがいなくちゃ満足できないんだ。ファニー・プライスの胸に小さな穴をあけてやるんだ。……」  
(II, vi)。

こういうことを言っている間は、ヘンリーの気持には自信に基づくいたずらの要素が大きかった。ところが、彼女と会う回数が増えるにつれて、彼は本気で彼女を愛するようになっていった。そして、真剣になって彼女の心をつかむことに腐心するようになった。ヘンリーが今まで付き合ってきた女性たちとは趣を異にしたファニーの思慮深さ、おとなしさに彼は惹きつけられたのであったろう。そして、ファニーの社交界入りの祝いの舞踏会のはきは、妹のメアリーを利用して、ファニーが彼からのプレゼントのネックレスを抵抗なしに受け取れるように画策したし、更に大きな努力としては、ファニーの兄のウィリアムが海軍に入っているが、うだつが上がらないでいるのを、ヘンリーが伯父のクロフォード提督に働きかけて、その引きで大尉に昇進するように計らってやった。その他、大小様々な点で、ヘンリーのファニーを喜ばすための心遣いには瞠目すべきものがあった。

このような下工作をした上で、ヘンリーはサー・トマスを訪れて、ファニーとの結婚を申し込む。前々から形勢を察していたサー・トマスは大満足でこの話をファニーに取り次ぐ。しかし、期待に反してファニーの返事は否である。サー・トマスの様々な説得（ウィリアムが受けた恩義をも含めての）も何の効果もない。別室で長時間返事を待っていたヘンリーも、やむなく帰って行く。

ファニーはこのとき伯父に対して、「結婚する気持になるほどには、あの方を好きになれません」（“I cannot like him, Sir, well enough to marry him.”）と簡潔な返事をしたが、後に見るように、これには多くの思いがこめられていたのである。

しかし、ヘンリーは勿論、一度の拒絶で諦めはしなかった。その後も、繰り返し求婚すると共に、妹のメアリーをも彼が素晴らしい男であることを折にふれてファニーに説くように仕向ける。メアリーは、今まで、数多くの女性に追いかけられた男を、ついに仕留めるのは女として



の最高の名誉だとか、彼の、女性たちの恋心を誘う癖は、自分の方から女性に惚れるのに比べれば、妻の幸福にとってさして脅威にはならないとか、兄にとって有利だと思ふことを並べ立てて、ファニーの気を引こうとする。こういう言葉が、ファニーにとって如何に的外れのものであるかには、メアリーは思い至らないのである。

ファニーがサー・トマスの言いつけで、生家のあるポーツマスに暫く帰ることになったときも、ヘンリーはわざわざポーツマスを訪ねて、ファニーと、彼女の親兄弟に会った。このときのヘンリーの態度は非常に紳士的で、ファニーの目にも次のように映る。

彼は、この前会ったときより全体として感じがよくなっていた。マンスフィールドで会ったどの時よりも、おだやかに、丁重で、ひとの感情に気を遣うようになっていた (Ⅲ, x)。

事態がこのまま進めば、あるいはヘンリーの努力が成功する可能性も生じたかも知れない。しかし、前にも見たようにヘンリーとマライアとの突然の駈落ちによって、万事は烏有に帰したのであった。ヘンリーは人妻を誘惑する、あるいは人妻に誘惑されるという演技の魅力に抗し切れなかったのであろうか。冷静に考えれば、ヘンリーの駈落ちは甚だ採算の取れない行動である。このことに関し、ダレル・マンセル (Darrel Mansell) は諸家の説として次のように紹介している<sup>4)</sup>。

- (イ) 自分が本当に愛してもいない既婚婦人と駈落ちして、真に愛している女性との見込を棒に振ることの必然性のなさ。
- (ロ) この駈落ちは、ヘンリーのそれまでの行動から自然に生じるとは思えぬ。
- (ハ) 終結を急ぐ余り、作者はヘンリーを元の悪の道へ無理に引き戻したのだ。

その他、ヘンリーの行動に関しては様々な批判がなされ得るであろうが、私は、彼が自分の中の actor に圧倒されたのだと考えたい。

## (2) メアリー・クロフオード

メアリーは頭の回転が速く、人との応対も巧みで、如才ない所がある。彼女と接する者は、知らぬ間に彼女に好感を持つほどである。

彼女の特徴の一つは金銭の力を非常に強く信じていることである。ハーブを弾くのが得意で、ロンドンからマンズフィールドへ来るときも、ハーブを運んで来る。しかし、ノーサンプトンの町で十日間もハーブが留め置かれてしまって届かない。彼女は農場で沢山使われている荷馬車を一台雇って運んでもらおうとするが、折しも乾草収穫の時期で忙しく、いくら金を出すと言っても、どの農夫も馬車を用立てようとはしない。金よりも収穫の時期を逃さぬ方が大事なのである。彼女は驚いてエドモンドに言う、

「ロンドン流の主義で考えれば、何だってお金で解決がつくはずなのよ。この田舎の習慣の頑固さには少々呆れてしまいましたわ」  
(I, vi)。

バートラム家の長男トマスが重病にかかって生命も危うい状態になったとき、ロンドンのメアリーからファニーに次のような手紙が来る。

「あんな立派な青年が、花の盛りに摘み取られるなんて、本当に悲しいことです。サー・トマスは悲嘆に暮れていらっしゃるでしょう。私も、このことではとても悩んでいます。ファニー、ファニー、あなた笑っていらっしゃるようね、そして、分かっていますよというような顔をしているんでしょう。でも、誓って言いますけれど、私は医者を買収したことなんかいいわよ。可哀そうな青年！——もしあの人死ねば、可哀そうな青年が二人この世の中からいなくなることになるんだわ。そうなったら、富と地位が、一番ふさわしい人の手に落ちるんだと、あたし、誰にでも、おめず臆せず言ってるつもりよ。……サー・エドモンドの方が、他のどの『サー』よりも、バートラム家の財産を有効に遣うだろうということは、あなたも信じるでしょう」(III, iv)。

メアリーは、トマスの死によって、エドモンドが家を継ぐことになるだろう、そうなれば金のないことだけが彼女の不満の種だったエドモンドと自分が結婚することも実現するだろうと、冗談めかして冷酷な計算をしているのである。それにしても、「医者を買収したことなどない」

というのは無気味な言葉である。

メアリーの心の姿が更に明白に表れるのは、ヘンリーとラッシュワース夫人（マライア）との駈落ちに際してである。この事件の後でメアリーと会って話をしたエドモンドは次のような手紙をファニーに書いて来る。

「『あなたの妹さんに責任を負わせてヘンリーを弁護しようとは思いませんわ』に始まって、メアリーは長々と弁じ立てましたけれど、ファニー、それはとてもそのままお伝えすることのできるような内容ではありませんでした。……要するに、両人の馬鹿さ加減に対する怒りなのです。愛したことなど一度もなかった女性に引っ張られて、自分が愛している女性を失うようなことをするヘンリーの愚かさを非難し、更に、ずっと前から無関心さを示していた男に本当に愛されていると思ひ込んで、せっかくの身分を捨てて、こんな窮地に飛び込むマライアの愚かさを咎めるものでした。……」(Ⅲ, xvi)

エドモンドは更に続けて、メアリーがこの事件に関して反感も、恐怖も、女らしい、つつましい嫌悪も示すことなく、ただ両人の愚かさのみを強調していることに呆れたと書いている。

メアリーはこの事件の含む重大さに何ら気づいていないから、弥縫策を講じて世間体をつくろうことしか考えない。しかし、勿論そのくらいで収められる生やさしい事件ではなかった。

この事件に際してのメアリーの態度から、遅まきながらエドモンドは彼女の真底を知ったのであった。彼女がその後エドモンドに会ったとき、「快活そうに、ふざけたような笑み」を浮かべてエドモンドの心を引きつけようとしたが、既に彼の心は戻るべくもなかった。

### Ⅲ 三姉妹

#### (1) バートラム夫人

バートラム夫人はウォード (Ward) 家の次女である。美人で穏やかな気質で、何事においても夫の言う所に従う。体を動かすのが嫌いで、終日ソファに坐って刺繍をすることで時間をつぶしている。どういう話題にも興味を示さないが、一度、ファニーとヘンリーとの結婚の話が出た

ときだけは、彼女なりの関心を示した。

バートラム家の子供たちが人生において失敗するのは、一つにはこの母親の、のんびりした放任主義の結果であったろう。彼女は『自負と偏見』のベネット夫人と共通するものを持っている。

## (2) ノリス夫人

ウォード家の長女で、バートラム夫人の姉である。牧師のノリス氏と結婚し、妹の家の近くの牧師館に住む。やがて夫が死亡すると近所の更に小さな家に住み、バートラム家に入入りして、二人の娘たちを過度に褒めそやし、御機嫌を取って日を過ごす。バートラム家の世話になって暮らす身となった未亡人としては、それがバートラム夫妻に気に入られる最も有効な方法だと浅はかにも思い込んでいるのである。

ノリス夫人の甘やかしと形式的・表面的教育の結果は二人の娘に次のような形で表われる。

娘たちが有望な才能を持ち、幼くして知識を与えられながら、自己認識や寛容さや謙虚さなどの……心掛は全然備えていないことは不思議ではなかった。気立て以外のあらゆる点では、素晴らしい教育を受けていたのであるが (I, ii)。

ノリス夫人が二人の娘に甘いのに反して、ファニーに辛く当たるのは、一つには弱い者いじめであり、一つには、それによって二人の娘たちやその親たちの御機嫌を取ろうがためなのである。元来内気だったファニーは、ノリス夫人から何かにつけて叱られるため、ますます消極的にならざるを得なかった。

## (3) プライス夫人

プライス夫人は三人姉妹の末娘で、家族の反対を押し切って貧しいブライス大尉と結婚した。結婚後、姉たちとの不和が続いたが、貧乏暮らしで誇りも失い、ついに長女のファニーをバートラム家に引き取ってもらったのであった。

年頃になったファニーが、せっかくのヘンリー・クローフォードからの求婚を受け入れないので、サー・トマスは、彼女がバートラム家の豊

かな暮しに慣れて思い上がっているのだと考えたのであった。そこで、生家の貧しい生活を見せれば財産家の有り難さが分かり、ヘンリーに対する考え方も変わるだろうという理由から、彼女をポーツマスに送ることにしたのであった。

久し振りに生家に帰るのでファニーは大喜びだったが、現実に見る生家は狭苦しく、不潔で、父親は酒の臭いをさせて品の悪い話し方をし、幼い子供たちが大声を挙げて騒ぎ回り、ファニーは一瞬の落ち着きも与えられなかった。

母のプライス夫人は、雑然たる多量の家事に圧倒されて何事もきちんとできない状態であった。

彼女の日々は一種の緩慢な空騒ぎの中に過ぎて行った。常に忙しくしているのだが、仕事ははかどらなかつた。予定には常に間に合わず、それを嘆きはしても、やり方を変えるわけではなかつた。金を無駄に遣うまいと願いはしても、その工夫や計画はなかつた……  
(Ⅲ, viii)。

この有様は、正にサー・トマスがファニーに見せようと思った通りのものだったかも知れない。そして、彼の思惑通りに事が運ぶ可能性もあつたであろう。但し、それはファニーに彼女独自の事情がなかつたとして話である。

#### IV ファニー・プライス

ファニーは幼いときから体が弱かつた。パートラム家に来てからも、庭でバラの花を摘んでいて疲労の余り頭痛を起こしたこともあつた。体が弱いと共に、エドモンド以外には味方になってくれる者のないパートラム家で、殊にノリス夫人の意地の悪い掣肘を受けながら育つたので、彼女は内向的な性格にならざるを得なかつた。こうして、心身共に弱々しい感じの少女になっていった。

しかし、彼女が十七～八歳になり、大人たちの仲間入りをする頃から、一概に弱いとばかりは言えぬ面が見えるようになる。例えば、ヘンリーが、家庭劇が実現できなくて残念だった、サー・トマスの帰国が一週間遅ければよかったのと言ったとき、ファニーがどう答えたかは次

のように記されている。

「私は、伯父さまの帰国が一日でも遅れて欲しかったとは思いません。伯父さまはお帰りになったとき、劇を全面的に取り止めるようにとお命じになりました。そのことから見ても、私たちが準備の段階より進まなかったのは、せめて、ましなことだったのだと私は思います」

彼女はこれだけ多くの言葉を彼に向かって言ったことは今まで一度もなかった。また、誰に対してでも、これだけ腹を立てたことはなかった。言い終わったとき、彼女は震え、自分の思い切った言葉に顔を赤らめていた (II, v)。

長い間、周囲に気を遣いながら生きてきた彼女が、自分こそ事を決する場合の最高のガイドだと悟るのもこの頃である。自分の領地を見に行き帰って来たヘンリーが、ファニーに事情を説明して、もう一度見に行くべきかどうかについて忠告を求めたとき、彼女は次のように言う。

「私たちは、その気になりさえすれば、他の誰よりも勝る案内者を自分自身の中に見つけることができるのです」 (III, xi)。

そして、ファニーの独立心が強いことの最大の証拠は、彼女が様々な事情、説得にも屈せず、ヘンリーの求婚を断固として拒絶し続けることであろう。エドモンドから、ヘンリーの妹が、彼女の拒絶の強硬さに驚いていると聞かされたとき、彼女は次のように答える。

「ある男性が一般に見てどんなに感じのいい人であっても、ある女性に受け入れられない、愛されないという可能性はあることを、女性は皆感じていると思います。あらゆる完全さを備えた男性だとしても、自分が好きになった女性はすべて自分を好きになるに決まっているとは断言できないと思います」 (III, iv)。

この言葉は一般論のようでありながら、ファニーの胸に秘められたヘンリーに対する批判を暗示しているものであろう。ヘンリーの妹や、パー

トラム家の人々の買いかぶりにもかかわらず、彼が actor であり、女性に関して節操のない男であることを、ファニーは見抜いているのである。

ヘンリーが、ファニーの兄ウィリアムの昇進を斡旋してくれたことも、有り難いことには違いないが、それと結婚とを引き換えにするのには、彼女の頭は明晰すぎた。サー・バートラムやメアリーの、このことに基づく説得や勧奨も彼女を動かすことはできなかった。

ヘンリーが、彼女のはっきりした拒絶を意に介しない如く、求婚を続けることは、こういう気持の彼女には甚だ心外であった。

彼女は腹が立った。このように自分勝手に、人の気持を考えないしつこさには怒りがこみ上げて来た。前々から厭わしいものだった心遣いの不足と、相手の都合の無視とが彼は少しも治っていないのだ (Ⅲ, ii)。

さて、ファニーがヘンリーの求愛に応じない根本の理由は、彼女がエドモンドを愛しているからであるということになっている。そのことは抽象的には作者によって何度か語られているし、それを素直に認めている評者も多い。例えば、デヴリン (D. D. Devlin) は次のように言っている。

ファニーを救うのは、エドモンドに対する彼女の愛である。……金銭や、社会的地位や、因習的基準などの圧力から逃れることができるのは、ただ愛によってのみである<sup>5)</sup>。

ここに記されていることは正しいであろうが、読者として物足らなく思うのは、エドモンドが結末近くなるまでファニーの気持に全然気づいていないことである。(男性の方から女性に対して愛の表白がないのに、女性の側が先にそれをするのは当時の社会の掟の禁ずる所であった。) 一般的に言って、男性は自分を強く愛している女性の気持に、こんなにも長く気づかずにいられるものであろうかという疑問が湧く。これは作者が物語を運ぶ上の一つの技巧だったのかも知れないが、読者としては、エドモンドとは何と鈍感な男なのだろうと呆れ、メアリーを諦めたエドモンドが

遂にファニーと結婚する段になっても、この夫婦は果してうまく行くであろうかという危惧を抱かざるを得ない。作者が結びの部分詳しく書くことを控えているのは、こういう点についても賢明な計算をした結果かも知れない。すなわち次の如くである。

抑え難い情熱が静まり、変わる事のない愛情へと移るのに、どのくらい時間がかかるかは、人によって非常に差があることを知っているので、この場合にも私は時日を記すのは控えることにする。読者は、思い思いの期間を想定して見ていただきたい。——ただ、次のことだけを信じて下さることをお願いする、すなわち、そうなるのがちょうど自然な時に、(それより一週間も早くはなく、) エドマンドはクローフォード嬢について思い悩むことを止め、ファニーが望むのと同程度に、彼もファニーと結婚することを願うようになったということである (Ⅲ, xviii)。

### (3) 結 び

前作『自負と偏見』について、オースティンは、姉のカサンドラ (Cassandra)宛ての手紙に次のように記している (1813年2月4日付)。

あの作品は、どちらかと言うと明る過ぎて、ピカピカ、キラキラ (bright and sparkling) してい過ぎます。影が必要だと思えます。

『自負と偏見』は、この手紙の書かれた1813年一月に出版されたのであるが、その原形が『第一印象』(First Impression) という題名で構想され、書かれたのは、オースティンが二十歳から二十一歳にかけてのことであった。その後、大幅に手を加えたのであったが、元々の雰囲気は残っていて、三十八歳の彼女から見れば、「『自負と偏見』は明る過ぎる」と映ったのかも知れない。

『マンスフィールド・パーク』は、1811年二月頃書き始められ、1814年に出版されたものであるが、執筆と出版との時期が離れていないこともあって、執筆当時の作者の気分を反映したものとなっているのではないかと思われる。



実際、『マンスフィールド・パーク』は「ピカピカ、キラキラ」してはいない。そして影がある。

この小説の舞台となる土地と、そこに住む人々について考えてみよう。扱われているのは三カ所、すなわち、マンスフィールド、ロンドン、ポーツマスである。マンスフィールドは表面上、静かな自然に囲まれた理想的な楽園のように見えるが、そこに住む人々の営為は、サー・トマスやその娘たち、またノリス夫人などに見られるように俗臭に満ちたものである。

ロンドンは汚濁を宿した都会である。クローフォード兄妹を育てた伯父であるクローフォード提督は、争ってばかりいた妻が死んだ後、愛人を家に引き入れて一緒に住んでいる。クローフォード兄妹が、才気に満ちていながら、その行動に倫理感が欠けているのは、この伯父の影響もあるであろう。そして、この兄妹は、ロンドンの軽佻さと汚濁とをマンスフィールドまで運んで来るのである。

ポーツマスは、軍港として明るい活気に満ちているかに見えるが、そこにあるプライス家は、しばらく振りに帰ったファニーが、居たたまれない思いがするほどに乱雑さと喧騒とが支配する家である。

この小説で扱われた乱行の締めくくりであるかのように、結末の部分で、ヘンリー・クローフォードとラッシュワース夫人、それからジョン・イエイツとジュリア・パートラムとが駈落ちする。しかし、この件については、作者は詳しく具体的に語ることはせず、ただ、ファニーの父親が持ち帰った新聞の記事と、メアリーがファニーに書き送った簡単な報告とによって、間接的に読者に知らせるに留めている。そして次のような言葉をつけ加えている。

罪や不幸について語るのは、他の人たちのペンに任せよう。私はできるだけ早く、そういう不愉快な話題は取り止めにして、自分自身はさして悪いことをしたわけではない人々は、まずまずの幸せな状態に戻してやろう。その他のことについては口を閉ざすことにしよう（Ⅲ, xvii）。

このように書いた作者は、人生の影の部分の存在を十分認めつつも、それのみを強調することは避けようとしたのであろう。しかし、普通の

小説ならば最も明るい出来事になるはずのヒロインの結婚、すなわちフ  
ァニーがエドモンドと結ばれるくんだりさえ、前述したように、何かくす  
んだ感じの雰囲気になっている。

D. D. デヴリンは次のように記している。

ジェイン・オースティンは教育—道徳教育—の問題と、社会のあら  
ゆる階層における自由の問題とを提起している。そして、これほど  
暗澹たる見通しを示しているイギリス小説は、他にはない<sup>6)</sup>。

たとえ、この評語が極端であるにしても、少なくとも、オースティンの  
全作品中におけるこの小説の位置は指摘していると言えよう。

〔注〕

- 1) Tony Tanner: *Jane Austen*, p. 161
- 2) この劇は、オースティンがバース (Bath) に住んでいた間に六回上演  
されており、彼女もそれを見たことと思われる。
- 3) Claudia L. Johnson: *Jane Austen, Women Politics and the Novel*, p. 107
- 4) Darrel Mansell: *The Novels of Jane Austen, An Interpretation*, p. 136
- 5) D. D. Devlin: *Jane Austen and Education*, p. 114
- 6) *ibid.* p. 112